

社会保険大和郡山総合病院泌尿器科における12年間 (1981~1992年)の外来, 入院患者および手術統計

社会保険大和郡山総合病院泌尿器科 (部長: 大森孝平)

大森 孝平, 五十川義晃, 河瀬 紀夫¹⁾, 伊集院真澄²⁾
生間昇一郎³⁾, 窪田 一男³⁾, 守屋 昭⁴⁾, 吉江 貫⁵⁾
森田 昇⁶⁾, 趙 順規⁷⁾

CLINICAL STATISTICS ON OUTPATIENTS, INPATIENTS AND OPERATIONS AT THE DEPARTMENT OF UROLOGY, YAMATOKOORIYAMA SOCIAL INSURANCE GENERAL HOSPITAL DURING 12 YEARS FROM 1981 TO 1992

Kouhei Ohmori, Yoshiaki Isogawa, Norio Kawase,
Masumi Ijuuin, Syoitirou Ikuma, Kazuo Kubota,
Akira Moriya, Hiroshi Yoshie,
Noboru Morita and Junki Tyou

From the Department of Urology, Yamatokooryama Social Insurance General Hospital

A clinical statistic survey was made on outpatients, inpatients and operations at our department between 1981 and 1992.

(Acta Urol. Jpn. 39: 1187-1190, 1993)

Key words: Clinical statistics, Urology

緒 言

1993年4月1日より社会保険大和郡山総合病院は、奈良社会保険病院と、名称を変更しベット数も300床となった。当院は、1947年社会保険三輪病院として開設されその後1958年に社会保険大和郡山総合病院と名称を変更している。泌尿器科は、1974年に開設され現在まで約19年経過した。今回、病院名称変更を機に現存するカルテをもとに、過去12年間(1981~1992年)の外来, 入院および手術の統計を行ったので報告する。

なお、1人の患者が複数の疾患をもっている場合に

は、おのおのの疾患について分類を行い、同様に1人の患者が複数の手術を受けた場合もおのおのの手術について集計した。

外 来 統 計

1. 新患者数 (Table 1)

12年間の外来患者総数は8,927人で、81年は410人であったが92年には1,049人と増加しており、89年以降は年間1,000人前後になっている。男女比は平均男59.4%, 女40.6%であった。

2. 年齢層 (Table 2)

外来新患者の年齢層では、90年以降で40, 50, 60歳代の割合が増加し、年間新患者の半数を占めていた。

3. 疾患頻度 (Fig. 1)

非特異的感染症患者が86年までは全体の40%を占めていたが、86年の49.5%をピークに減少傾向を示し92年には31.6%であった。これは大和郡山市の射精産業の衰退との関係が大きいと考えられる。尿路結石症、

- 1) 現: 京都市立病院泌尿器科
- 2) 現: 伊集院クリニック
- 3) 現: 回生病院泌尿器科
- 4) 現: 碧済会巽病院泌尿器科
- 5) 現: 吉江医院
- 6) 現: 高済会高井病院泌尿器科
- 7) 現: 済生会中和病院泌尿器科

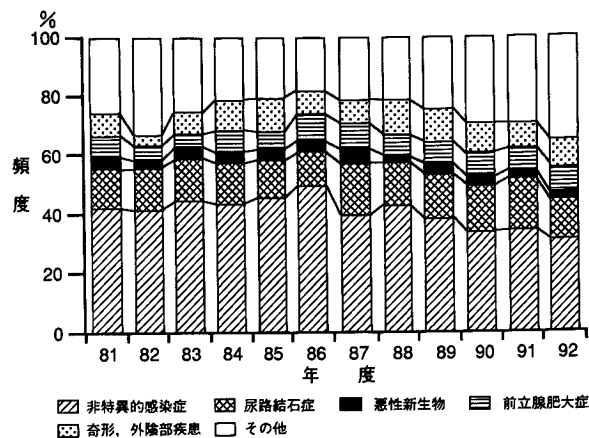


Fig. 1. 疾患頻度別分類

Table 1. 外来新患患者数の推移

年齢	総数	男 (%)	女 (%)
81	410	225 (54.9)	185 (45.1)
82	352	204 (58.0)	148 (42.0)
83	406	241 (59.4)	165 (40.6)
84	787	512 (65.1)	275 (34.9)
85	806	483 (59.9)	323 (40.1)
86	550	316 (57.5)	234 (42.5)
87	778	463 (59.5)	315 (40.5)
88	897	513 (57.2)	384 (42.8)
89	1,000	615 (61.5)	385 (38.5)
90	957	567 (59.2)	390 (40.8)
91	935	541 (57.9)	394 (42.1)
92	1,049	619 (59.0)	430 (41.0)
計	8,927	5,299 (59.4)	3,628 (40.6)

Table 2. 外来新患患者年齢層の推移
(1981~1992年)

年齢 \ 年度	81~83	84~86	87~89	90~92
9~19	176	400	303	464
20~39	329	616	718	665
40~59	315	549	770	972
60~79	291	486	613	723
80~	56	90	142	156

Table 3. 入院患者数の年次推移

年齢	総数	男 (%)	女 (%)
81	2	2 (100)	0 (0)
82	3	3 (100)	0 (0)
83	4	2 (50.0)	2 (50.0)
84	128	106 (82.8)	22 (17.2)
85	81	59 (72.8)	22 (27.2)
86	75	55 (73.3)	20 (26.7)
87	89	69 (77.5)	20 (22.5)
88	110	83 (75.5)	27 (24.5)
89	108	85 (78.7)	23 (21.3)
90	112	90 (80.4)	22 (19.6)
91	127	95 (74.8)	32 (25.2)
92	114	88 (77.2)	26 (22.8)
計	953	737 (77.3)	216 (22.7)

Table 4. 入院患者年齢層の年次推移
(1981~1992年)

年齢 \ 年度	81~83	84~86	87~89	90~92
9~19	0	41	46	28
20~39	2	55	57	63
40~59	3	60	61	76
60~79	4	104	120	148
80~	0	24	23	38

悪性新生物、前立腺肥大症の割合に大きな変化はないが、顕微鏡的血尿および尿失禁の患者数が増加していた。顕微鏡的血尿に関してみれば、81年に0.7%の割合であったものが92年には12.5%に増加しており、厚生省の予防医学の推進をよく反映していると思われる。

入 院 統 計

1. 入院患者数 (Table 3)

84年以降年間100人前後の入院があり、総数953人で、男女比は平均77.3%対22.7%でした。

2. 年齢層 (Table 4)

入院患者数の増加してきた84年以降でみると、近年

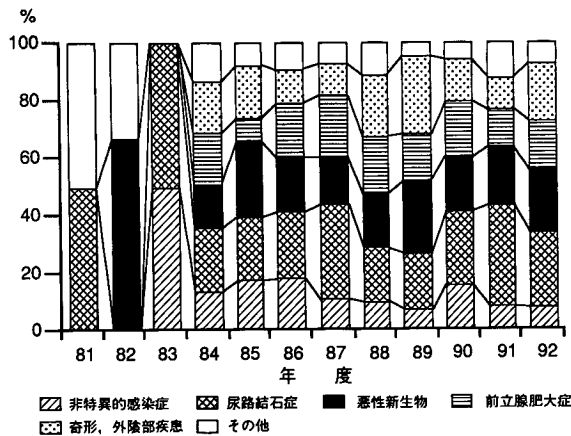


Fig. 2. 入院患者疾患別分類

Table 5. 手術件数の年次推移

年齢	総数	男 (%)	女 (%)
81	0	0 (0)	0 (0)
82	1	1 (100)	0 (0)
83	0	0 (0)	0 (0)
84	74	69 (93.2)	5 (6.8)
85	60	53 (88.8)	7 (11.7)
86	40	36 (90.0)	4 (10.0)
87	48	39 (81.3)	9 (18.8)
88	112	99 (88.4)	13 (11.6)
89	108	99 (91.7)	9 (8.3)
90	76	68 (89.5)	8 (10.5)
91	91	77 (84.6)	14 (15.4)
92	248	171 (69.0)	77 (31.0)
計	858	712 (83.0)	146 (17.0)

若年層の占める割合が減り、高齢層の占める割合の増加傾向があった。50歳以上の入院患者の占める割合は、84年が全体の44%でしたが92年には73%と増加していた。

3. 疾患頻度 (Fig. 2)

入院患者を疾患別にみると84年以降に大きな特徴はなかった。

4. 入院日数

平均入院日数は21.0日であった。91年までは平均入院日数は、20日前後であったが、92年以降は高齢化社会における膨大化する国民医療費を抑制するという厚生省の方針に従い短期間の入院期間を目標としており92年度の平均入院日数は7.9日であった。

手術統計

1. 手術件数 (Table 5)

12年間に実施された手術件数は、858件であった。男女比は、平均男83%、女17%であり男性優位であった。92年度の手術件数が248件と急激に増加したのは、外来 ESWL の件数増加による。

2. 年齢層

手術年齢層は入院の増えた84年度でみると50歳以上の占める割合は全体の44%であるが、その後その割合が上昇し91年度52%、92年度60%と、入院患者の年齢層の推移と同じように若年層の占める割合が減り、高齢層の占める割合の増加傾向があった。

3. 主要手術件数 (Table 6)

858件の手術の内、TUR-BT, TUR-P といった内視鏡手術が207件 (24%)、環状切除術、精管結紮術、コンジローマ焼灼術といった外来手術が256件 (29%)と両者が全体の半数以上を占めていた。腎癌、膀胱癌などに対する開腹手術は、わずか17件 (2%)であった。尿路結石症に関しては、91年以前では開腹手術が行われていたが、92年以降では開腹手術は行われずかわって ESWL がおもな治療法となり大きな割合を占めてきている。近年、人口の高齢化に伴い、麻酔や全身管理の技術の進歩にもかかわらず手術適応がなくカテーテル留置にとどめおかれている尿閉患者がすくなくならずみられ、そうした患者に対応するため92年度より尿道スパイラルカテーテル留置術を行い良好な成績をえており¹⁾、今後も増加していくものと思われる。

結 語

1981年から1992年までの外来、入院および手術の統計を行った。

1) 外来新患患者総数8,927人、入院患者総数953人、手術件数858件であった。

Table 6. 主要手術件数

手 術	年 度			
	81~83	84~86	87~89	90~92
TUR-BT	0	21	21	27
膀胱全摘	0	0	3	2
腎摘出術	0	5	3	5
腎盂尿管切石術	0	3	20	5
尿管全摘術	0	1	0	5
ESWL	0	0	0	158
TUR-P	0	34	50	43
前立腺摘除術	0	1	7	2
精管結紮術	0	13	8	10
精巣固定術	0	15	10	3
精巣摘除術	0	6	4	8
陰嚢, 精索水腫根治術	0	6	8	7
背面切開, 環状切除術	0	41	94	70
コンジローマ焼灼術	0	4	15	6
外尿道口カルンケル切除術	0	4	11	8
尿道スバイラルカテ留置	0	0	0	15
その他	1	18	25	39

2) 外来疾病では顕微鏡的血尿および尿失禁の患者数が増加していた。

3) 手術では内視鏡手術および外来手術が主体であった。

文 献

- 1) 五十川義晃, 大森孝平: 金属ブジーガイドによる尿道ステント留置法. 泌尿紀要 39: 231-235, 1993

(Received on June 2, 1993)
(Accepted on June 29, 1993)